

稲賀敬二氏著『源氏物語の研究

— 成立と伝流 —

森 一 郎

「中世」における源氏受容の動態を、従来未開拓の分野に大きく緻を打ち込んで生き生きと浮彫りせられた本書は、新しい研究をきりひらいた先達の書である。深く学恩を感謝し、心より敬仰するものである。

源氏物語の「中世」における受容を著者は中世の諸資料の本文、勅物の精査、解釈——意味の発見——を通して体系化された。一行の行文も精細な調査の厚みに支えられており、ずっしりとした学問の重みである。中世の源氏学者の動態、人間関係が活写、浮彫りせられて、「人間」の生み出す源氏学の様相がまざまざと現前しているのは著者の卓抜せる力量である。

吉川家本親行奥書に見える素寂の浮彫りなど、卓抜な解釈力をもって一語一句の精確な読みから史実を組み上げていられる。新資料岩国吉川家蔵源氏物語の奥書によって、親行自筆夢浮橋は親行の手許に残らず、一時、素寂の許にあったことを明らかにされた。この事実は、紫明抄の若紫巻についての親行と素寂の間答とかみ合わせで、河内本の二流という著者の新見を導き出すことになっている。河内本が唯一の親行本からの派生ではなく、素寂系を考えねばならないという新知見である。

紫明抄の若紫巻の一句をめぐる素寂の強弁や今川了俊の「源氏六帖抄」の記事の素寂の才覚ぶりなどから、河内方源氏研究を二分していく人物的契機を描破される著者の見解は、「人間」を介在させた研究史、受容史の精細にして見事な展開である。

かくて河内本ならざる河内本の流布が想定されるわけである。論理的に言って、吉川家本の夢浮橋巻以外の諸巻は素寂校訂本である可能性が強い。著者は、親行の河内本証本の行能筆桐壺巻と吉川家本桐壺巻とを比較し、吉川家本は別本の性格を有する広義の河内本と認定し、こういう吉川家本の性格は素寂の家本の流れをくむところから生じたと解釈された。中世において「河内本」とよばれたものの真実が、親行・聖覚の流れだけでなく素寂の流れを加えて考えねばならぬという事は、河内本のみならず別本というものへの新しい視角を提出されたものとしてその功績はきわめて大きい。「源氏物語絵巻」、「無名草子」、「風葉和歌集」などに引用される本文は別本系統であり、また梗概書の一群は風葉和歌集の本文と一致するなどの事実から、中世を通しての流布本の位置を占めていたものは別本系統のあるものではないかとさえ考える、という注目すべき考説に著者は達していられるのである。

素寂に照準をあてた著者は、素寂の注釈を、吉川家本勅物、異本
紫明抄所引の素寂初期の注、晩年の紫明抄へとあとづけられ、また、
素寂、孝行同人説をくりひろげるなど、素寂を大きく浮彫りせられ
た。素寂の紫明抄に見える叙述方法が、漢文を引用するばあい、文
中の詞句、構成要素の位置を、前後に移動させるというやり方であ
る事は中世源氏物語梗概書の梗概化一般の方法と軌を一にしている
ものとして注目されるあたりは、中世の源氏物語の梗概化という受
容の問題にたえず焦点を定めて、その方法をさぐっていられる視座
を示すもので、素寂の活動の意義が、著者の研究の視点の中でとら
えられてきているのである。

中世源氏物語梗概書の各論は諸本を四類に分類し、源氏物語鑑賞
享受の実態を、各類別に明らかにされたもので、その精細な御研究
の集積によって従来ほとんど空白にひとしかったこの分野がずっし
りと厚みをなして体系化されたのである。著者の関心が梗概叙述の
方法に最も強いことは受容の方法の進展、受容の動向をさぐる要を
なして効果をあげている。また、源氏物語提要と花鳥余情との関係
をさぐられて、注釈史展開をあとづけようとされたことは教示され
るところ大きい。注釈の動向を知る上に提要の役割を介在させられ
たわけであるが、兼良や、三条西家源氏学との連関をさぐって、十
四世紀までの源氏物語享受形態を望見されたところに著者の新知見
がある。

傍流の中に息づき保守されているかっでの伝統的な説みを望見し
ようとする著者の立場、これは著者の源氏物語伝流の研究であると
同時に源氏物語成立論なのである。すなわち本書は、たえず源氏物
語の「成立」をたぐる意図につらぬかれた中世源氏物語研究・享受

の動態の解明なのである。

著者は、おびただしい源氏物語梗概書を精査されていく中で、源
氏研究の傍流の系統に源氏物語の古い享受の名残り、残影を見出さ
れた。源氏物語の成立を「中世」の地点から望見するという著者の
きわめて斬新な研究視座と方法はこの精査の中から生まれたのであ
る。かくて源氏物語の「成立」を紫式部日記においてでなく、「中
世」の地点から望見し、斬新にしてユニークな仮説を生み出してい
かれたのである。

そこに本書の体系の有機的必然性が存するのである。

現行巻序の整った五十四帖の源氏物語が紫式部において成立せし
められたのではなく（五十四帖の整序が紫式部によるのではないと
いう意味。制作は紫式部作を大部分と考えていられる）中世時代に
こそ「成立」——正しくは「系列化」——したというのが著者の確
立せられた御説である。すなわち五十四帖の古典源氏物語の「成
立」は中世時代の享受とかかわると見られるわけで、あらゆる角度
から論証につとめられた。そこに享受史的研究といっても、単に享
受の動態をたどるのはちがって、源氏物語そのものの歴史的具
体性の解明が目指されているのであり、新しい源氏物語の相貌を浮彫
りする「源氏物語の研究」である。謙虚なお人柄であり、厳正な学
者である著者は、ひかえめに「中味は『中世源氏物語の伝流』とい
うに近い」と言っておられる。その「中世源氏物語の伝流」の解明
の功績がいかに大きいかはすでに述べた。しかし、わたくしの見る
ところ、梗概化という中世源氏受容の動向を見きわめる中で、著者
の視点は源氏物語の「成立」にたえず光っている。著者の問題意識

は平安末期の梗概化の芽というべき巻名巻序一覽表としての「源氏

目録」を問題とされる。現行の目録とは異なる数種の目録が想定され、それが現行の目録に確定するまでの流動が著者にとって問題なのである。

現行の「源氏目録」が成立するまでに「源氏物語の類」の流動があり、「輝く日の宮」「桜人」「巢守」等の散佚諸巻は現行五十四帖に系列化する過程において脱落したものと考えられ、それらの在りし時点の「源氏物語の類」のすがたを復元してみようとする。また、「源氏物語の類」から現行五十四帖に系列化していく過程の複雑な再構成の想定をされる。

思うに、現行五十四帖を成立当初のものとして読む伝統的であり方も、源氏物語成立の歴史的具体性を追求する立場からは、一つの仮説にもとづく説みのありようにはかならない。されば現行の「源氏物語五十四帖」成立以前の流動する源氏物語のすがたを「中世」の地点から望見する著者の仮説も伝統には異端であつても学術的には同等の地位を有することというまでもない。

さて、著者の仮説の最大の焦点は巢守物語の成立にある。無名草子、風葉和歌集が著者の仮説の有力な手がかりとなっている。風葉和歌集には現存五十四帖に含まれぬにもかかわらず、宇治十帖とかかわりのある四首の歌が見出される。風葉集の記載方法からして風葉集編者からこの巢守巻の四首は源氏物語プロパーと同列に見られていた証と認めうるという著者の論理は首肯できる。無名草子の源氏物語人物評で、「巢守の中の君」「巢守の君」の二つの呼称につき、この二人の薫に対する態度の差から考えて、従来の宇治八の宮の姫君とする考えには疑問があるとされ、巢守物語の登場人物と考えられたことも賛成である。

無名草子、風葉和歌集は別本系統の本文に依拠しているから、定家や親行によって校訂された本文ではない別の系統のものには巢守巻（巢守物語）が存在した可能性がある。また、薫宮一家の子孫の物語という性格をもつ巢守物語が「源氏物語の類」の中で成立した可能性は強い。

現行五十四帖の構成を見てもグループごとの単元化が可能であり、一巻あるいはグループごとの発表、流布の可能性が強い。今日、五十四帖を一挙に発表したと思う人はまずないであろう。とすると、著者の言われる、匂宮巻——橋姫物語、竹河巻——巢守物語、紅梅——浮舟物語（巢守物語の骨子に基づく浮舟物語と、巢守物語残余部分の再構成としての紅梅巻の成立）宇治十帖の成立、巢守物語の弱体化Vというグループ別単元の成立は可能性がある。

巢守物語の想定される内容と浮舟物語の類似性から考察され、巢守物語の骨子に基づいて浮舟物語が作られたと想定され、存在意義のなくなった巢守物語が脱落していったという論理も首肯できる。はじめ匂宮巻——橋姫物語の系列に並存して竹河巻——巢守物語の系列が存したという想定にも論理が通っている。いまその細説をする余幅がないが、わたくしがこの想定に首肯する最大の理由は巢守物語の想定される内容が現行宇治十帖の世界、つまり薫を主人公としておしすすめていく世界の中で生み出されたものとして矛盾がなさそうだと考えうることにある。もっとも、薫宮というイメージは薫にそぐわぬ感があるのだが、想定される巢守物語の内容、薫宮の子孫の物語は薫の世界にかなうようである。それと、無名草子、風葉集の地点から望見できる別本系統諸本の世界が、定家や親行に校訂されてしまわない以前の、つまり源氏物語成立の原初形態に近いす

がたをうかがわせるものではないかということに著者の導きによって知るからである。

著者の仮説の組立ての一部として援用されている説、たとえば竹河巻は橋姫巻以下との間に夕霧の昇任などの点で直接関係を認めえぬ事などの一項は私見と相異する。けれどもその一項は著者としては竹河・巢守を同列の次元におくための心証としては大事であろうが、著者の仮説構築は他のもろもろの根拠で足りるのであろう。ゆえにわたくしから見るととき著者の仮説はゆるがないのである。

巢守物語を後人補作と見る論理は立てやすい。著者はその見方をわかりすぎるほどよくご存じの上で、この仮説を組み立てられた。

現存しないこの物語をめぐって提出された著者の仮説は、巢守物語の源氏プロパーとしての存否それじたいの問題に閉鎖して受け取るべきでなく、源氏物語全篇の成立・伝流の問題として望見的理解が必要なのである。

本書の教導するところのものは多大である。

注 拙稿「源氏物語の構想の方法——匂宮、紅梅、竹河の三帖をめぐって——」（『国語と国文学』昭和四十二年十月号）

参照。

（昭和四十二年九月三十日刊、B6判、六一九ページ、二〇〇〇円、笠間書院）

——甲南女子大学助教授——